

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日本の侍の使った甲冑に関する研究
Author(s)	ムンフバト, エンヘー
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 22期 : 73 - 83
Issue Date	2008-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038820">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00038820</a>
Right	
Relation	



# 日本の侍の使った甲冑に関する研究

ムンフバト・エンヘー

## 0. はじめに

私は、モンゴルの大学の2年と3年に在学している時に、旅行会社で働いていた。そこで、たくさんの方の日本人の観光客に会った。ツアーの間に、モンゴルの歴史のことを話すと、何人かのお客さんに「モンゴルのチンギス・ハーンは日本の侍であったという話を聞いたことがありますか?」、と何回も聞かれたことがある。これは、義経が衣川で奥州藤原氏の襲撃を受けて自害したのではなく、実は生きのびて北海道から中国大陸に渡ってジンギスカンになったという伝説である。もちろん、この「義経＝ジンギスカン伝説」はあり得ないことだと思う。このような考え方が日本社会で流布したのが江戸末期から大正期であったことを考えると、当時の中国大陸の利権を狙うという日本の社会的な風潮から生まれたのではないかとも思われる。ただ、「義経＝ジンギスカン伝説」は、私に「侍というのは誰か?」そして「侍とは何者か?」という疑問を抱かせた。また、トム・クルーズ主演の『ラストサムライ』という映画を見る機会があり、一層、侍に興味を持った。『ラストサムライ』で、馬に乗った武士達は霧の中から走って来るシーンがあり、そこから甲冑に魅力を感じるようになった。馬術、弓術、剣術を駆使して戦う侍は、モンゴルの戦士に似ている。モンゴルの甲冑は革と鉄からできていて色は入っていない。しかし、日本の甲冑は防具であるとともに、芸術でもある。日本の甲冑に色彩が豊かである。こういう理由で、侍に興味をもち、研究テーマとした。以下、日本の甲冑について述べていく。

まず、山岸素夫・宮崎眞澄著の『日本の甲冑の基礎知識』(1990年、雄山閣出版)と笹間良彦著の『図解日本甲冑事典』(1988年、雄山閣出版)の甲冑の時代の変化を要略する。

## 1. 古墳時代

日本で最古の甲冑として現在、古墳時代の甲冑が出土された。したがって、日本の甲冑史は古墳時代から始まると言っていいだろう。笹間良彦著の『図解日本甲冑事典』では、兜と鎧を二種類に分けている。兜の場合は衝角附系と眉庇附系、鎧の場合は短甲系と掛甲系である。

衝角附系の兜というのは、兜の前に軍艦の舳のように突き出した形で、眉庇附系の兜というのは、兜の前の下の方に帽子の眉庇を突き出した形である。これらの名称は文献に伝えられたものではなく、現代の考古学者らの形式区分の時付けた名称である。

古墳時代の甲冑は鉄で出来ていた。三角形や長方形の鉄板を革綴(とじ)あるいは鋳留し、形成したものと草摺を別に設けた堅硬な板物鎧と長さ10センチの細片に断った鉄小札を横に糸絡み重ね革緒(かわお)や組糸で威し立てて形成した小札鎧という2種類の甲冑があ

る。

考古学上では、これに短甲・卦甲の名称をあて、板物甲を「短甲」、小札甲を「卦甲」と称した。板物甲には衝角(しょうかく)付兜正面に鎬(しのぎ)の立った鉢に数段のシコロを付けた兜や眉庇付兜と呼ばれる丸鉢に文様を透彫した装飾的な大形の眉庇を設けた兜、及び頸鎧(あかべよろい)・肩鎧・箆手・(こて)当てなどの小具足が添えられた。これらは主に四世紀以降の古墳から出土し、その構造上徒立戦用の甲冑と考えられている。韓国から同じ様式の板物甲が出土したことからは朝鮮半島を経て、伝来した様式とも推測される。

小札鎧には、衝角付兜または眉庇付兜のほか、小具足として頸鎧・肩鎧・箆手・臑当など添えられた。甲冑が板物製から小札製に推移したことを示すこれらの遺物は五世紀半以降の古墳から出土された(山岸・宮崎, 1990)。

## 2. 奈良時代から平安時代

この時代は仏教の興隆(こうりゅう)、唐の文化を模範とする律令政治の徹底、辺境の開発経営などが、国家統一の意識をもって推進された時代である。日本の文化は各方面にわたり飛躍的な発展を遂げ、武具にも唐代の様式が濃厚に反映されたと考えられている。しかし、当期の甲冑の完全な伝世品は一領も存在していない。その様式や構造はわずかな文献の記述と、正倉院伝来の大破した小札甲及び東大寺大仏展須弥壇下出土の残片など、不完全な遺物によって推察しかない。

当時の甲冑は律令によって設置された諸衛府及び軍団つまり古代律令国家の武力的基盤を成す官兵の着用で主である。挂甲は胴甲のみ構成から主に行幸の供奉宮門(ぐぶみやもん)の警備などを担当した諸衛府の武官の武用や儀仗に着用されていたが、平安時代中期頃から次第に武用を離れて、後期にももっぱら儀仗の料に推移したものと考えられる。

鉄甲は廃れた定期的に修理を加えられるに止まり、革甲を基本とする方向へ大転換がされた。革甲に変化した後も兜は鉄を用いたことが推測される。これは中世の兜の鉢は鉄製であることと相通じ、この時代における中世甲冑との基本構造の共通性を見出しうる。その頃の甲冑は短甲、挂甲などと呼ばれている大陸から伝わった防具を真似て作った物であった。

## 3. 平安時代から鎌倉時代

平安時代になると、戦いの形態が騎馬によるものに変化しそれにともない甲冑の形態が著しく進化した。騎馬戦では弓が主な武器なので矢に対する防備が重要になり大きな袖、脇を守る梅檀の板・鳩尾の板などが特に発達した。下腹部・大腿部を保護する草摺は左右が長く、前後は馬に適合するようにスリットが入っていた。

兜には古代のシャーマンが儀式で鹿角を使用した影響か鍬形と呼ばれる前立て飾りが付いた。初期のものはいたってシンプルな作りであったが、個人の美を競う戦に風習から次第に華麗な装飾を施したものに変化した。国衛の在庁官人や追討使・追捕使となり賊

徒の追討や辺境の乱の鎮定し、遺族に仕えるなどして、次第に勢力を伸長した。日本の甲冑史における中世の甲冑の始源は、平安時代中期設定し、いわゆる日本の純日本式の鎧は平安時代から登場した。

有力武士が前代の短甲・卦甲の制によりつつも、独自美意識と実用上の創意工夫を集約して、中世的な武門の甲冑を誕生させた。武士の戦闘は、騎馬武者である射戦を主として、従者は徒立となって戦った。甲冑は必然的に騎射戦に適応する様式の甲冑である大鎧と、従武者の着用する徒立打物戦用の簡便軽快な甲冑は「腹巻」と呼ばれ、後に「胴丸」を名称が変化し、発達した。

大鎧の過程において多大の影響を及ぼしたのは、王朝の貴族文化である。優美な宮廷の服飾、情緒的で洗練された貴族の美意識などが武具に反映して、威毛（おどしげ）の色彩感、絵革の文様、金物の意匠や造形など、主に外容の面において大鎧の形成に大いに寄与したものである。兜や袖は、杏葉と呼ぶ掌大の小鉄板をつけて肩先を防護し、腕にさした。構造は大鎧に比べて簡略で、徒立に適応する軽快な機能を有する。小具足は甲冑の付属具として、額から頬を覆う半首（はつむり）、腕に付ける箆手、草摺のはずれから膝頭までを護る膝鎧、足の臍に付ける脛当などが用いられ、上級武士は足に貫と呼ぶ毛皮製の沓を履き、徒立の下級武士が射戦を中心とする時は、弓射をよくするために射向（左側）の腕のみに箆手を付けていた。これを両手に付ける諸箆手に対して、片箆手と称する。大鎧と胴丸の折衷様式のごとき特異な「同丸鎧」も鎌倉時代に出現した。

鎌倉幕府が崩壊し南北朝の時代になると甲冑は小型で中身が充実になって変わって行きました。長刀等を振り回すので兜のしころが小型化し、左右を見回しやすい笠じころに変化した。同様に袖、草摺なども小型化し、梅檀の板・鳩尾の板は廃され、小型の杏葉に変わりました。こうして軽く、動きやすく、着やすくなったが、基本的な素材は小札を威す従来の方法でした。杏葉は染め革などで包んだり漆などをかけたりした鉄板で前は下級武士が袖の代わりに胴丸の肩に付けていたが鎌倉時代から袖が完備するとともに胸に付けるようになった。

#### 4. 南北時代から室町時代

甲冑は徒立戦に適応する機能と、より一層の防護力を要求され、隙間なく体を覆い包む傾向を示して、小具足が発達した。大鎧は胴を腰細に引き締め、小札を前代より細かく、薄くして軽量化をはかり、胴裏を栗色革でシコロは二、三段目、胴は正面から背面まで、草摺は二、三段目、袖は三、四段目まで鉄一枚交ぜとした。隙間を覆うべき胸板と前立挙の幅を広くし、射向に脇板を設け、草摺は幅を広くし、同じく隙間を塞ぐため両端に錠撓を入れて重なり合うように工夫した。平安時代の末期から鎌倉時代の前期を思わせる大鎧に南北時代的な小具足で身を固め、兜を被らないようになった。

徒立打物戦に適応する機能を持ち、従来下卒の着用とされていた右引合せ様式の同丸は凋落した大鎧の代わりに盛行した。胴を主とする軽快な鎧であったところから上級武士は

防備と威容のために兜と大袖を添え、小具足を便利に皆具した。兜の前立は新たな趣向によって形作られ、かつて将帥の威容を示した鍬形は当代の下克上の風潮から普遍化し、これに剣形を添えた三鍬形を生じた。さらに菖蒲鍬形・日輪・三日月・柏葉・獣角などの立物が造形された。胴丸の遺物は、南北時代から室町時代のものは大山紙神社に伝来した。

同丸より一層軽快な様式の腹巻は室町時代に流行した。これは当初胴丸と呼称されていた。腹巻の製作は胴丸と同様である。腹当も当期に用いられた。これは最も簡易で軽快な鎧である。

小具足は、甲冑の軽便化とは反対に戦闘の熾烈さを反映し、より一層隙間なく体を包んで防護する傾向を強め、ますます充実した。すなわち半首は廃れて喉輪と頬当を生じ、諸籠手の風が普及して筒籠手や篠籠手が発達し、伊予佩楯や宝幢佩楯などの膝鎧が盛行した。

室町時代に具足鍛冶の名や年紀を兜の鉢裏に刻むようになった。これは革小札と威毛を主体とした中世甲冑が凋落し、金銅丸・金腹巻など板物主体の甲冑の盛行に伴う具足鍛冶の地位の向上があったためである。または鉄砲の修験により劇てきに進化した。これまで小札を威した胴丸が伊予札や鉄板張りの胴丸に変わった。

## 5. 桃山時代から江戸時代

この時代は、戦国大名を服属をさせて全国を統一した豊臣秀吉により、封建体制の基礎が確立した時代である。武器は前代に引き続き槍が流行し、鉄砲も普及し、集団戦に威力を発揮し、甲冑の改革を促進した。かつて、室町時代の末頃から推定される新様式の甲冑を「当世具足」といい、一般的には具足と称していた。「今の世」を意味する「当世」具足は、隙間もなく体を覆い包んで防護する志向をより一層示した重装備の甲冑である。兜・胴と一体を成す専用の小具足を皆具した構成や肩上に籠手付の装置を設けた点は、当世具足を論じるうえで不可欠の要件というべきある。

具足は、当世の騎馬戦、徒立戦に機能する甲冑で、兜・胴と一体を成す専用の小具足を意図的に付属し、隙間なく体を覆い包む防具という意味で「当世具足」と称された。当世具足が、軽快で機能的な腹巻の様式を断承しなかった。背面に隙間のできる腹巻は、当期の隙間なく体を覆い包む志向に反することから排除され、胴丸の特色である右引合せ様式の機能と構造が認識・評価されたことにより、当世具足の基本的構造として、この胴丸様式が踏襲された。これを証する重要な遺例として巖島神社伊予札鶉革包紫糸威具足と紅糸威具足、銀小札白糸威具足などがあり、いずれも当世具足の部類に入る初期のもので、胴丸から当世具足へ移行した。

中世の大鎧・胴丸・腹巻などがその様式に応じた一定の構造・意匠・素材などは多種多様である。槍・鉄砲など武器への対応と、南蛮具足の影響から胴を鉄の板札や縫延革包の伊予札を主とした横矧胴・縦矧胴、鉄板製の雪下胴・一枚張胴など堅固な板物とし、小札製は少なくなった。喉輪も不必要になって廃れた。

肩上是革製より鉄製が多く、幅広くかつ短くして籠手付の竊を設けた。前胴と後胴を懸

け通し、従来金銅製であったコハゼには水牛の角や象牙など用いた。袖は南蛮具足の影響と打物戦への対応から廃止、籠手に仕付けた仕付け袖を用い、籠手にコハゼを利用して肩 upper に取り付ける置袖を生じた。

当世具足は威毛の部分が少なくなり、表面を金錆地・革包みなどにする事多く、威毛を用いたものも、黒糸・紫糸・紺糸などを主とした。兜も一新して当世兜になった。南蛮兜を模範とした桃山、鉄板を打出して物の形を象った形兜、張懸兜が嗜好された。筋兜は金錆地の六十二間、星兜も小星の六十二間が流行した。当世具足は機能・構造・構成・素材などの面で日本甲冑の最終的発達段階に到達したのである

江戸次代の中期になると富有な町人を中心とする都市文化が栄えたため、甲冑は為政者としての権威を示す一種の象徴的存在に化し、当時の工芸的趣向に基づく加飾が施されて威儀化していった。当世具足は軍隊の要求から生まれた堅実な様式を崩した。以後、機能とは無関係な意匠面での時流に応じた付随的变化を示しつつ推移し、幕末に完全な終焉になった。

## 6.1 兜

兜は敵の攻撃から頭を守るための防具である。鎧と具足とセットで用いる。日本には朝鮮半島を経由して伝わったと推測されている。これが純日本式の兜に変化したのは平安時代初期の頃である。兜は鉢とシコロとの2部からなり、鉢には眉庇が付属し、金物・絵革・立物・付物などで装飾することが多い。兜の数え方は地方によって一頭、二頭、と数えるところもあれば、一体、二体と数えるところもあるが兜が一兜、二兜と数えて鎧を一領と数える。山口県、岩国美術館には蟹を思わせる蟹形兜を初め、喋の形をしてる変わり兜やモンゴルの兜に似ている六十数枚の鉄板を矧ぎ合わせた星兜などの兜を主集した展示があった。

## 6.2 鉢

頭を覆う兜の主な部分が鉢と言う。鉢は半球状で、鉄でできている。鉄を素材とし、革を用いることもある。山岸素夫・宮崎眞澄さんの『日本の甲冑の基礎知識』という本によると昔は木鉢もあったという。

いろいろな名称の鉢がある。それは鉢の材料や兜の形式によって違う。鉄製の鉢は、鉄の板を継ぎ合わせ、鋸で留めて作る。兜の色が焦るを防ぎ、表面と裏面黒漆塗る。星兜と筋兜は鉄製の兜の代表と言ってもいいだろう。日本の甲冑が展示されているいくつかの神社や美術館に行ってみると展示物のほとんどは鉄製の星兜と筋兜だった。

山岸素夫・宮崎眞澄の『日本の甲冑の基礎知識』によると、星兜と筋兜は中世期頃によく使われていて、平安時代から室町時代の初期までの大鎧と、筋兜は南北時代か以降胴丸、腹巻とセットで用いられたと記されている。

星兜も筋兜も鉄の板を継ぎ合わせ、鋸で留めて作るが筋兜には星がない。星兜の星はサ

イズによって、大星・中星・小星と名称が違う。山岸・宮崎(1990)によると、星は材料によって鉄製の星と、銅製の金鍍金(金銅)・銀鍍金(銀銅)がある。金銅や銀銅の星は、主に葵葉座・篠垂・地板に打ち、鎌倉時代後期頃からは斎垣や金銅・銀銅板包みの腰巻などに打った。また、座星と呼ばれるものがあるが、これは星の下に小刻座を入れた装飾的な星を言います。平安時代の星の一部見られるが、鎌倉から南北朝時代には、八幡座・篠垂・斎垣・などに打つ鍍金の星に行われた。

筋兜と星兜の頂上に穴が開いている。その穴を頂辺(天辺)に穴と言う。天辺の穴は浅野誠一の『兜のみかた』(1998年、雄山閣出版)によると、天辺の穴は鉢幡座と天辺という金物で飾っている。鉄は布のように容易に形を作られないし、大きな鉄板を作るのが難しいので小鉄片を矧ぎ合わせて頭に被れるように形を作っていたので縦矧式の鉢にはこのような穴ができた。小鉄片でもそう簡単には作られなかったという。

時代とともに鉄工技術が進歩し、それにつれて縦矧式の鉢の天辺の穴がおのずれ小さくなった。鎌倉時代(1185年-1333年)には直径4センチぐらい、南北朝時代(1336年-1396年)3センチ前後、室町時代には2.5センチ前後。このように小さくなってきたが、無くすことはできなかったという。ところが横矧式の鉢を製作してから天辺の穴は無くなった。

山岸・宮崎(1990)によると、平安時代後期から鎌倉前期の鉢は、径四、五センチの大きい穴をあけているが、これは兜の着用胡法の基づくものである。頂辺の穴は平安時代に五センチ前後を最大とし、鎌倉時代の前期は四センチ前後、鎌倉中期頃以降、髻を出さなくなると三.五-二.八センチに縮小し、南北朝時代ごろには三-二.四センチになった。室町時代には二センチに満たないものが増えて、平安時代以来の伝統を形式的に継承し、用途は主に蒸れを防ぐものになった。鉢の後ろには鐙を付けている。その鐙には赤色の糸を下げられている。それは戦場で敵から味方を区別するためのものでいくつかの神社や美術館の展示物を見た時ほとんど星兜と筋兜に見られた。

兜の飾りには金銅や銀銅製の八幡座篠・垂・地板・斎垣・覆輪というのがある。八幡座は、頂辺の穴の廻りにつけた金物で、篠垂は細長い筋の金属の飾りである。地板は、板のような金属飾りで斎垣は、鉢の下の部分の金属飾りである。覆輪は縁を包む金属や革の飾りものである。平安時代末期頃に現れた板状の装飾金物で、鉢の前後、あるいは四方に板金一間~五間分を覆って伏せる。普通は篠垂と組み合わせてこの下に伏せるが、篠垂の代わりに金銅の星を打つことある。兜を称して二方白・四方白などというのは金銅や銀銅の篠垂、篠垂と地板、あるいは地板を据えた鉢の呼称である。

斎垣は、一間ごとに据える入八双形の中央に猪目を切り透した小板と、筋の上に懸ける覆輪からなる。南北朝時代には斎垣の覆輪を延長し、板金の縁を捻り返して立てた筋のすべてに覆輪を懸けて装飾した兜が現れた。これがいわゆる総覆輪で、星兜・筋兜ともに見られるが、特に室町時代には筋兜に盛んに行われ、総覆輪筋兜が流行した。

### 6.3 シコロ

シコロは兜の鉢の後ろから頸の辺あるいは肩まで下げている鉄や革でできたものである。段数は兜の形や時代によって違うけど三〜六段が多い。小札製のシコロと板札製のシコロというのがある。山岸・宮崎(1990)によると、中世のシコロは、本小札を縫い重ねて毛引威にするのが原則とし、板札製は室町時代の末期に至り用いられた。星か兜は一般的には五段数が多く、筋兜は五段数から三段数が多い。諸町時代の後期ころ三段数のシコロが流行し、末期には二段数、一段数が流行した。

シコロの一段目を鉢付板と称し、二段目を二の板、以下三の板、四の板と呼び、最下段は畦目・菱縫を施して装飾したので菱縫板と呼ぶ。シコロは一般的には革小札を主体として作り、小札は大きくて厚いため、札頭に漆を盛り上げない平小札を用い、鉢付板から菱縫まで自然に威しを下げた。この形状は杉の木に似ているから後世杉形と称した。平安時代のシコロは防護力を強化を目的として原則の革小札に鉄小札を交ぜるようになった。

鎌倉時代の後期頃にシコロの形状に変化が起こり、鉢付板から菱縫板まで斜めに開いて笠形になった。この形状のシコロを笠シコロと言います。鎌倉時代末期から南北朝時代には大笠ジコロが流行した。吹返は大形になるとともに強く折り返したため、吹返とシコロを合わせて二重となり肩廻りの防護が強化された。この傾向は室町時代に入るとより顕著となり、鉢の腰巻ほぼ水平に開き、これに鉢付板を水平に取り付けてシコロの開きを大きくした。そして三の板、四の板の小札に縦撓を付けて丸みを持たせ、菱縫板を垂直に近く威し付けるようになった。

#### 6.3.1 本小札製のシコロ

大山祇神社の国宝館に保存されている逆沢瀉威大鎧シコロは本小札製のシコロである。山岸・宮崎(1990)によると、鎌倉時代の後期頃にはシコロの形状が変わって、鉢付板から菱縫板まで小札板の裾を開き、広く張長出すようになった。この形式を笠ジコロという。厳島神社・浅葱綾威大鎧シコロは笠ジコロである。

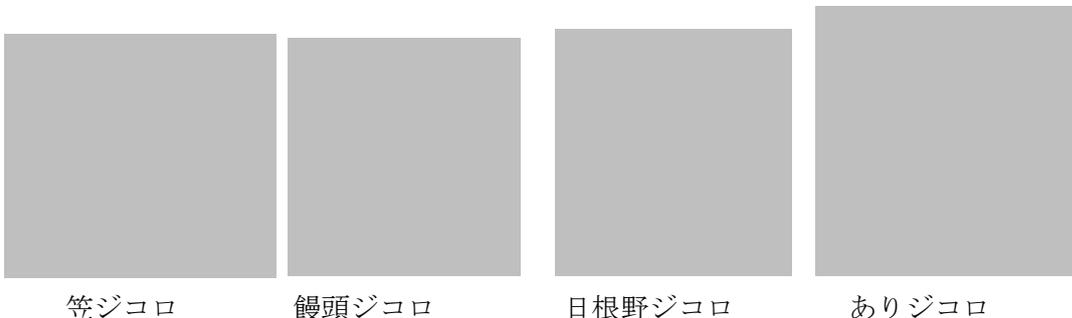
#### 6.3.2 板物製のシコロ

室町時代の末期頃から現れた金胴丸・金腹巻など、板物製の甲冑に添う兜のシコロ物製が多い。板物のシコロは、構造の相異により、板札を威し下げて足搔を持たせた板札製のシコロと、威毛のない板ジコロと区分されている(山岸・宮崎, 1990)。

板物製のシコロは、戦乱によって急増した需要に応えるため、製作上の省力化、迅速化をはかる目的から発生した。小札製のシコロに比べて、美観や気品、迫力など著しく劣ることは否めないが実用的には遜色なく、作製・修理とも容易な利点がある。これが近世に至り、当世具足の兜に設けた日根野ジコロ・越中ジコロなど板札の当世ジコロとして発達した。

板ジコロは、板札のシコロと紛らわしい区分名称で、これは威毛を用いず、二舞いの板

札を鉾留して形成した足搔のないしころである。シコロの両側の上のほうからちょっと後ろに曲がったものが見える。これを吹返という。



#### 6.4 立物

立物は兜の鉢に立てる物で鉢のどこに立てたによって名称が違う。鉢の前につける立物を前立と言ひ、後ろに付けたのが後立、兜の左と右側に付けたのが脇立という。

立物の種類

前立- 日輪、兎耳、半月、三日月、扇、蜻蛉、ノシ、

頭立- 鳥毛、熊毛、兎耳、天衝

脇立- 鹿角、牛角、蟹の鉾、蝶之

後立- 大釘、馬蘭、

山口県の岩国美術館を見学して驚いた。美術館の二階に上がると甲冑に関するものだけ展示されていた。『岩国美術館』には鎧よりは兜の展示物の方が多かった。一番目立った兜は蟹に鉾の立物を付け兜でした。いろいろな立物を付けた兜見ていたが蟹の形の兜と立物があると思わなかった。日本人は昔から海と関係があって生活して来ただろうし、海の生物を食生活に使って来た。それとは関係があるだろうけど海の生物から蟹の鉾の形を立物があった。立物は武士の権力を表すものだったので蟹よりは強い、大きな生物いるけど蟹を立物にしたのが不思議に思った。インターネットで兜について調べていたら面白い立物の写真あった。桃の形の前立。おそらくそれは桃山時代の兜だろう。



#### 6.5 大鎧

大鎧は「鎧」と呼ばれていた。大鎧は騎射戦に適応した鎧である。山岸・宮崎(1990)に

述べられた大鎧の構造上の主な特徴は下の通りである。

大鎧の特徴：

- 騎馬の射戦に適応する機能をもつ小札の甲冑である
- 構造は小札・威毛・金具廻・革所・緒所・金物からなる
- 兜・胴・袖の三つの部分を同作皆具して一領を構成する
- 胴は立挙前二段・後三段、長側四段、草摺は四間に作り、五段下がりを通とする。
- 胴の右側を分離して引き合わせとし、この分離した部分を脇楯と言います。
- 後立挙の二段目を逆板とし、肩上に障子の板を設ける
- 胴の前面に弦走韋を張る
- 胸脇の防護と威容のため、梅檀の板、鳩毛板を下げる
- 兜は星兜が普通で、袖は馬上での持楯的意義を有する大袖を原則とする。

大鎧は三つの物で完成する。兜や袖がない大鎧を「兜欠」「袖欠」と言う。本物の袖や兜がないけど別の物を付けて展示した大鎧を「兜付」「袖付」と言う。小札・威毛・金具廻は大鎧を構成する三大要素となります。前立挙の上部に設けられる、胸板、左脇の脇板、右脇の脇楯の壺板、肩上の障子板、大袖や梅檀板の冠板、鳩尾板など大鎧の特有なものである。

## 6.6 胴丸

胴丸は、大鎧の後で普及したもので、上級の武士達が来ていたという。山岸・宮崎(1990)に述べられた胴丸の主な特徴は、次のようなものである。

- 初期には兜・大袖を添えない軽快な構成で、肩の防御として肩上に杏葉を付けた。
- 胴は長側を一続きに作って右脇を引合とし、後胴を上重ねて引き合わせる。
- 立挙は前二段・後三段、長側は四段で、草摺は八間五段下がりを通とする。
- 金具廻として胸板・脇板・押付板を設け、肩は蔓肩通とする。

これらの特徴は胴丸を徒立戦に適応していることを示す。

南北朝時代以降、騎射戦用の大鎧は衰退して、胴丸を上級の武士達が用いるようになると胴丸の地位が上昇して兜・大袖を同作皆具した。

## 6.7 胴丸鎧

胴丸鎧は、大鎧と胴丸の長所を併せた甲冑である。愛媛県の大山紙神社にはただ一領遺物が国宝館に保存されている。山岸・宮崎(1990)によると、

胴丸鎧の構成式：

- 兜・胴・大袖を同作皆具して一領を構成する（大鎧式）
- 胴の長側は一続きに作り、右脇で引き合わせる（胴丸式）

- 草摺七〜八間と細かく分割する。(同丸式)
- 壺走韋を張る (大鎧式)
- 逆板を設け、これに大座の鑲を打って総角を下げる (大鎧式)
- 梅檀板・鳩尾板を胸板に下げる (大鎧式)
- 肩上に障子板を立てる (大鎧式)

## 6.8 腹巻

胴丸は徒立戦用の甲で、上級の武士達に用いられていた時腹巻は下級の武士達の着ていたものである(山岸・宮崎, 1990).

腹巻の一般的な特徴:

- 胴のみの甲で、甲と袖は原則として付けないが後に甲・袖を同作皆具するようになった。
- 背面を引き合わせとする。従って背割りとなり、押付板と後立挙が二分され、背中に隙間ができる
- 立挙は前・後とも二段、長側四段、草摺七間五段を普通とする。
- 杏葉を設けない
- 胴丸より小形で軽量かつ機能的で、腰廻りを引き締め、胸が張る
- 背面引合式の構造上、左右対称形となる

引き合わせの位置の違いが胴丸と腹巻の大きな相異点で、小 札・威毛・金具廻・革所・金物などの形制と製法は同様である。中世の腹巻の遺物の大部分は室町時代の中期以降のものである。

## 9. 終わりに

日本にいる間にいろいろなところへ見学や旅行に行った。博物館、特に美術館とお城には少なくとも一領の甲冑、もしくは兜が必ずあった。説明には、どこの殿様、何という將軍が使っていたかもちゃんと書かれてあった。大山紙神社には国宝になった甲冑の90%が収集した国宝館があった。モンゴルの博物館にも甲冑は展示されているものの、日本の甲冑のように詳細の歴史的記述は、残ってない。また、甲冑の研究者も少ない。モンゴルの甲冑について書かれた書物もほとんど目にすることがない。驚いたことは、日本には、甲冑の教室まであった。甲冑を売っているお店も沢山あった。はじめにで、述べたように日本甲冑は武具でもあり、芸術である。本当に素晴らしい国宝だと思う。

## 参考文献

- 山岸素夫・宮崎眞澄 (1990) 『日本の甲冑の基礎知識』 雄山閣出版  
 笹間良彦 (1988) 『図解日本甲冑事典』 雄山閣出版  
 浅野誠一 (1998) 『兜のみかた』 雄山閣出版

## 見学調査

巖島神社

岩国美術館

大山祇神社